

## もっと知りたい 福生市の史跡と文化財（5）

ガイドマップ「史跡と文化財」では取り上げていませんが、より知っていただきたい文化財について紹介しています。

### 福生に残る中世資料 いたび 板碑 観光ガイドマップF-4 ほか

福生には、武士が活躍していた時代の様子を知ることのできる資料はほとんど残されていません。文献で確認できるものは2つで、1つは鹿児島県こしきしま甑島むねすえに伝わった小川氏系図（近年焼失）というもので、平安時代終わり頃の宗末という人物のところに福生という記述があるほか、平山季重すえしげ、俊重とししげという人物には福生支配についての記述が見られます。もう1つは戦国時代の終わり頃に、八王子を中心に支配していた北条氏照という人によって出された制札という古文書です。

その間、福生で人々が生活をしてきた様子を伝える文献資料はありませんが、その頃人々が生活をしていなかったのかというと、そうではないようです。市内に残るお寺はこの頃にできたものが多いことがわかっているほか、この頃の年号を刻んだ板碑がいくつも残っています。

これらの資料を見ていくと、文献には残されていないものの、多くの人々が福生でも生活していたことを知ることができます。

現在、福生市内に伝わっている板碑は全部で 69 基あり、そのうち8基は市外からもたらされたことが分かっていますので、61 基がもともと福生にあったものです。年号のわかるもので1番古いものは嘉元2年（1304）で、1番新しいものは永正7年（1510）です。

ふくしょういん 福生院（観光ガイドマップF-4）の境内では、市内で2番目に古い嘉元4年（1306）銘板碑（福生市指定有形民俗文化財）を実際に見ることができます。



嘉元四年銘板碑（福生院）

# もっと知りたい 福生市の史跡と文化財（5）

ガイドマップ「史跡と文化財」では取り上げていませんが、より知っていただきたい文化財について紹介しています。

## いたび 板碑の見方と特徴

板碑とは、比較的薄い一枚板で作られた石塔の一種で、片面にのみ主尊や銘文などが刻まれているものです。形は上部を山形に切ってあり、その下に二本の線が刻まれた縦長です（板碑模式図参照）。

福生で見られる板碑は武蔵型板碑と呼ばれるもので、荒川流域で採れた緑泥片岩りょくていへんがんという緑がかった色の石で作られているのが特徴です。

板碑は死者を供養するために作られたものや、生きていた間に自身の死後の安寧きやくしゆくようを願って作る逆修供養といわれるものがあります。

板碑の真中に描かれているのは本尊を表すもので、梵字ほんじで書かれています。1番多いのは阿弥陀如来を表すキリークという文字です。福生で判明しているものの9割近くはこのキリークです。ほかにも福生院で見られる板碑の本尊は、福生でも珍しいバク（釈迦）です。



板碑模式図

主な種子



阿弥陀如来 (キリーク・正字)    阿弥陀如来 (キリーク・異体字)    釈迦如来 (バク)



阿弥陀如来 (キリーク・正字)



勢至菩薩 (サク)    観音菩薩 (サ)

阿弥陀如来はしばしば三尊形式で刻まれる。



市内最古の銘を持つ板碑 嘉元二年銘板碑（永昌院蔵）